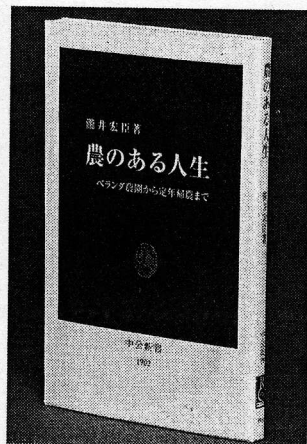


「農のある人生」

瀧井 宏臣著



一九九九年に農業基本法が三十八年ぶりに改定された。農業への市場原理や企業の参入を促し国際競争力を向上させる、いわばこれまでの小規模農家主体の在り方に抜本的転換を迫るものだ。食料自給率40%、六十五歳以上の農業従事者が六割に達する中、耕作放棄地は増加し、今や日本の農業は瀕死の状態である。個人経営を集約し大規模化する法改定はカンフル剤を注入し、九死に一生を得ようとする苦肉の策といえないこともない。

そんな中、むしろ農業の柵をなくし、より広い層へ働きかけ、国民一人一人に形にとらわれない「農ある生活」に携わってもらおうとで再生を目指そうと、全国のユニークな試みレポートしたのがこの一冊だ。

農業は果たして作物をつくりだすだけの営みなのか。読了し見えてくるのは土や堆肥づくり、作付け、草とり、収穫など適期ごとの

「人間本来」の営み紹介

活動がただ生産だけを目的とするのではなく生活の中に節目をつくり、「協働」の充実と潤いをもたらす要素が大きいということだ。もちろん、自然環境の保全面も含め、魅力を感じた人たちが、今、棚田やミカン一本のオーナーから、クラインガルテン（小さな庭）での週末や月末農家、ベランダでの1㎡農園、地方へ定住しての「半農半X」生活、そして団塊世代の定年帰農と制度を超え、個々に動きだしている。土を踏みしめ風を感じ汗することがけっして特別でなく「人間本来」の営みであることが具体例を挙げ述べられている。

NGO「風の学校」を主宰した中田正一氏の言葉は印象的だ。サービスや情報など第三次産業は風向きだけで変動する上潮、工業など二次産業は月の引力の影響をうける中潮、農業を含めた第一次産業は悠久の流れを保つ底潮というのだ。万人が豊かな底潮に乗った生活、そこに成立する文明や文化こそ今求められているのではないか。作業所運営の傍ら農作業をするようになり、土をいじっている

と硬まった感覚が和らぐ体験だけからでもぜひお奨めしたい。「脳」の次は「農」の予感が。

評・宮本誠一（NPO夢屋プラネット代表）

▲中公新書・840円

◇たさい・ひろおみ 1958年東京都生まれ。ルポライター。